

1. 日時

2. 場所

3. 対象

4. 背景

平成24(2012)年、内閣府が「自殺総合対策大綱」でセクシュアルマイノリティの自殺リスクについて言及し、「無理解や偏見等がその背景にある社会的要因の一つ」として「教職員の理解を促進する」と明言した。平成27(2015)年には文部科学省が「性同一性障害等に係るきめ細やかな対応の実施等について」と題する通知を発行し、学校での具体的な取り組みが要請された。また、令和5年(2023年)には、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律(通称:LGBT理解増進法)」が制定され、学校の設置者及び学校に対してLGBTQに関する教育・啓発の推進、教育環境の整備、相談機会の確保が努力義務として定められた。法務省の「主な人権課題」には、「性的指向」「性同一性障害」が明記されており、セクシュアルマイノリティは国の人権課題の一つと認識されている。

セクシュアルマイノリティが自分のセクシュアリティ(性のあり方)を自覚するのは、小学生から高校生までの年齢期が多いとされている。

まずトランスジェンダーの人が「性別違和感を自覚し始めた時期」は小学校入学前までが56.6%、小学校低学年が13.5%、小学校高学年が9.9%と、実に80%が就学前あるいは小学生のうちから対応を必要としている(※1)。また、自殺念慮を抱いたことがあるトランスジェンダーの人は58.6%いる(※1)。

さらに、小学生から高校生の間に「LGBTをネタとした冗談やからかいを見聞きした経験」のあるセクシュアルマイノリティは84%、自身が「いじめや暴力を受けた経験」があるセクシュアルマイノリティは68%にのぼる(※2)。一方で、小学生から高校生の間に「自分自身がLGBTであることを打ち明けた相手」は「同級生」が最も多い(※3)。これらのことから、前述の「教職員の理解」のみならず、身近な同級生らの理解も重要であるといえる。

このように、セクシュアルマイノリティのメンタルヘルスの低下や周囲の無理解を考慮すると、早期に多様な性に関する正しい知識や肯定的なメッセージを教育現場で発信していく必要があるといえる。そのためにはまず教職員の正しい理解と、適切な支援のできる体制づくりが肝要である。

(※1)中塚幹也. 封じ込められた子ども、その心を聴く:性同一性障害の生徒に向き合う. 2017, p.50. ふくろう出版.  
 (※2)いのちリスペクト. ホワイトリボン・キャンペーン. LGBTの学校生活に関する実態調査(2013)結果報告書. 平成 25 年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業. 2013, pp.8-9.  
 (※3)いのちリスペクト. ホワイトリボン・キャンペーン. LGBTの学校生活に関する実態調査(2013)結果報告書. 平成 25 年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業. 2013, pp.4-5.

5. 目的

- (1) セクシュアルマイノリティの子どもたちにとってもしやすい学校づくりのために、多様な性について理解する。
- (2) セクシュアルマイノリティの子どもたちにとってもしやすい学校づくりを通して、すべての子どもがもしやすい学校づくりをめざす。

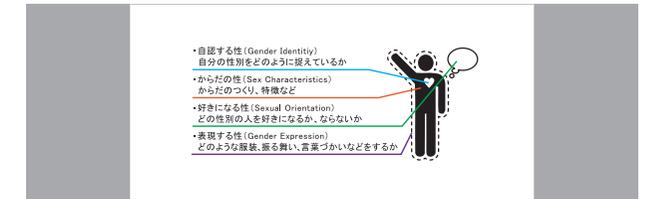
6. 内容

時間	内容	留意点
5分(5分)	挨拶	
45分(50分)	映像を再生する 途中、映像の指示に従い、映像を一時停止して話し合う時間を設ける。 話し合い終わったら終わったら映像を再生する。	3~4人の班をつくる ワークシートに記入する (発表してもよい)
5分(55分)	アンケートに回答する	
5分(60分)	挨拶	

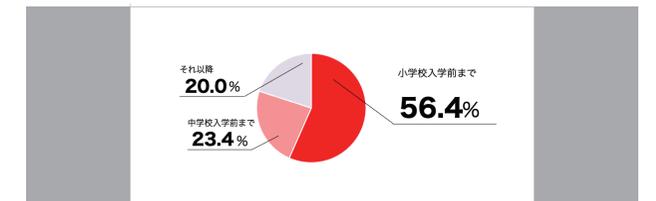
7. 資料

- プリント「研修計画書」(認定特定非営利活動法人ReBit制作)
- 映像「多様な性ってなんだろう?~すべての子どもがもしやすい学校とは?~」(認定特定非営利活動法人ReBit制作)

① 多様な性とは?(約6分)  
セクシュアリティ(性のあり方)の概念と、様々なセクシュアリティについて説明する。



② LGBTQの子どもたちの現状(約2分)  
セクシュアリティを自覚する時期、いじめ・自殺等、人間関係・メンタルヘルスに課題があることを、データをもとに解説する。



③ LGBTQの若者たちの話(約10分)  
バイセクシュアル女性とトランスジェンダー男性のライフヒストリーを紹介する。



④ LGBTQの子どもたちが学校生活で直面しやすい困難(約2分)  
日常の中にある、注意すべき言動や環境を、具体例をまじえながら解説する。



